

報告書：プロバンス大学における日本語教育の変遷と現状について

プロバンス大学 秋 廣 尚 恵(2011.4.6)

1) 日本語学科の創設から 2008 年まで

プロバンス大学で日本語学科が開設されたのは 1988 年。創設者は俳句の専門家である准教授のアンドレ・デルティユ氏である。2008 年に定年退職するまで、長年にわたり日本語学科長をつとめた。

設立時は学生も少人数で、学生が取得できる資格も、応用外国語学部の英語・日本語科の学生が専攻する言語コースの学士号、修士号、もしくは、*Diplôme Universitaire*（ディプロム・ユニヴェルシテ）という大学内で出される資格に限られていた。あるいは、他の専攻を持つ学生が第 2 外国語、第 3 外国語として初級日本語を選択するのみであった。

スタッフは、准教授 2 名に講師 1 名、そして非常勤講師が必要に応じて雇用されていた。はじめの数年は、講師の一部を日本から招いていたが（国際交流基金、もしくは日本の大学教員などが招かれていたそうである）、その後はもっぱら現地採用が多かったようである。ちなみに、現在、アグレジェ教授であるファヴェネク氏も 1999 年から数 2 年にわたり、講師を務めている。

授業について言えば、1・2 年生では、デルティユ准教授と当時の講師陣が作った教科書 *Japonais, Manuel de première année*¹を用いつつ、デルティユ准教授が文法解説の講義を行い、講師、非常勤講師が作文と漢字の授業、ラボ、口頭練習の授業を担当するという形式を取っていた。教材は、3 年次からは、現代日本文化担当のコンドミナス准教授とデルティユ准教授、講師達により、様々なテキストを使った授業がなされていたようであるが、いずれにしても当時の学生の多くが、応用外国語学部の学生であり、経営・経済の内容を外国語と平行して履修していたという理由もあり、選ばれたテキストの多くが、日本経済やビジネス日本語に関するものであった。

日本語への関心が次第に高まる中で、学生の人数は年々増えていった。そこで 2008 年より、初めての日本言語文化専攻科が新たに開かれることになった。デルティユ准教授はその設立を準備した後に退職。その後任に、中世日本宗教史専門の准教授であるプロトンス氏、そしてプロバンス大学で既に講師を務め、その後はマルセイユのドミエ高校で教鞭をとっていたアグレジェ教授²のファヴェネク氏が着任し、新しいチームがスタートすることになった。

¹ A. Délteil, Séko Y. & Takei Y. (2006), *Japonais, Manuel de première année*, Publication de l'Université de Provence

² 「アグレジェ教授」(professeur agrégé) は、主に高等学校と大学の機関で、教育に携わる教授のことである。修士課程 2 年を終了し、アグレガシオンという国家試験に合格していなくてはならない。ちなみに日本語のアグレガシオンの試験は毎年行われるわけではなく、行われたとしても一回の試験で、国内でわずか 2,3 名の合格者しかいない。以降「ファヴェネク教授」と書いておくが、大学やそれに準ずる研究機関で研究と教育の両方の分野に携わるいわゆる「教授」(professeur)とは別のステータスであることを断っておく。ちなみにいわゆる「教授」になるためには、博士号を取得したのち、准教授となり、さらに教歴と研究歴をつけて「研究指導資格」HDR (habilitation de direction de recherche) を取得していなくてはならない。

2) 新チームと日本語学科の現在

a) 教員構成

新チームは、准教授 2 名（プロトンス、コンドミナス）、アグレジェ教授（ファヴネク）、講師（秋廣）でスタート。2010 年には、日本語教師能力検定試験合格者であるカルニノ・優奈が講師として着任。また、必要に応じてコマ給で授業を担当する非常勤講師 2 から 3 名（世古、二俣）が常時チームに加わっている。ちなみに世古講師、二俣講師の 2 人は既にデルティエ時代にも講師を勤めているベテランである。

教員のステータスによって担当できる内容に差がある。講師・非常勤講師が担当できるのは実習授業のみである。アグレジェ教授が担当できるのは講義及び実習。准教授が担当できるのは、研究指導と講義及び実習であるが、准教授であっても「研究指導資格」(HDR: *Habilitation à diriger des recherches*) を持っていなければ、研究職をめざす修士課程 (*Master de recherches*) や博士課程の学生の正式な指導教官にはなれない。ちなみに現在プロバンス大学には、研究指導資格を持った准教授はいない。したがって、研究職希望の学生は必然的に本学の他研究科（主に現代文学研究科）の修士課程、博士課程へ入学するか、あるいは、他大学の日本語科の修士課程、博士課程へ入学しなくてはならない。

b) 学生の人数の推移

2008 年入学者は、日本語言語文化専攻が 40 人、応用外国語学部、英語－日本語科が 60 人、選択科目としての日本語履修者が 20 名、合わせて 120 名程度であり、全学年あわせても 210 名あまりであった。年々その数は増えており、現在では、249 名の入学者、全学科合わせておよそ 400 人程の登録者がいる。外国語学科としては、英語科やスペイン語科をしのいで、本学で一番の大所帯となった。

年度	1 年生	2 年生	3 年生	修士 1 年生	修士 2 年生	合計
2008－2009	120	50	30	6	4	210
2009－2010	191	81	28	8	4	312
2010－2011	249	88	45	12	5	399

本学の日本語ブームはコンテンツ文化の影響が最も大きい、それだけではない。最近、プロバンス大学の位置するエクス・アン・プロバンスでは、近郊のカダラッシュで数年来から始まった数十年がかりの国際的研究プロジェクト ITER (*International Thermoreactor Experimental Reactor*) の実現にともなって、多数の日本人研究者や技術者を受け入れてはじめている。それを受け入れるフランス企業、学校、公共施設の中で、一般市民向け、一般企業向けの日本語講座担当の教員、異文化コミュニケーションのコンサルタントや、翻訳／通訳者の需要が出始めており、学生が就職先を考える際に、労働市場として無視できない存在になりつつあるようだ。また、普段の生活の中でも、日本人と接する機会が増えてきている。好きなことを勉強して、仕事も見つかるかもしれないという希望は、日本語科を選択する大きな動機付けになっているようである。

また、2012 年からは、プロバンス大学（エクス・マルセイユ第 1 大学 文学部）とポール・セザンヌ大学（エクス・マルセイユ第 2 大学 政治経済学部）の統合が予定されている。ポール・セザンヌ大学では、日仏国際法学専攻修士課程の開講を予定していることから、2 大学統合以降は、文学部以外の学部からも日本語を学びに来る学生が増えることも予想される。

(c) 授業カリキュラム

以下に示すのは、プロバンス大学の授業カリキュラムとその内容の詳細である。

学年	科目	時間／週	担当	授業形式
1 年生	文法	3	ファヴネク教授	講義
	作文・漢字	1,5	秋廣講師	グループ実習
	会話	1,5	カルニノ講師＋非常勤	グループ実習
	ラボ	1	カルニノ講師＋非常勤	グループ実習
	日本文化(歴史)	1,5	プロトンス准教授	講義
	日本文化（芸術）	1,5	コンドミナス准教授	講義
2 年生	文法	1,5	ファヴネク教授	講義
	作文・漢字	1,5	ファヴネク教授	グループ実習
	会話	1,5	カルニノ講師＋非常勤	実習
	ラボ	1	カルニノ講師＋非常勤	実習
	読解・翻訳初級	1,5	プロトンス准教授	実習
	日本文化(宗教)	1,5	プロトンス准教授	講義
3 年生	日本文化(ポップ文化)	1,5	コンドミナス准教授	講義
	文法	1,5	ファヴネク教授	講義
	作文・漢字	1,5	ファヴネク教授	実習
	会話 1	1,5	秋廣講師	実習
	会話 2	1	カルニノ講師	実習
	翻訳 1	1,5	プロトンス准教授	実習
	翻訳 2	1,5	コンドミナス准教授	実習
修士 1 年	日本文化	1,5	プロトンス准教授	講義
	文法・作文・漢字	2	ファヴネク教授	講義
	会話	2	秋廣講師	実習
	翻訳 1	2	プロトンス准教授	講義
	翻訳 2	2	コンドミナス准教授	講義
修士 2 年	翻訳	2	ファヴネク教授	実習

(d) 1 年生・2 年生の日本語授業：積み上げ式教育で初級をマスターさせる

1 年生、2 年生については、大人数に対応するために、2008 年より、授業の一部をグループ分けして行うことになった。とりわけ、大きな変化としては、作文と漢字、ラボ、口頭練習の授業を、3 つから 4 つのグループに分け、少人数により徹底したドリル練習が始まったことである。これまでは、これらの科目は各講師によってある程度自由に教えられていたが、以降、「実習授業」(TD : travail dirigé)としての性格づけがはっきりし、ファヴネク教授の行う文法の「講義式授業」(CM : cours magistral)に密着した内容を講師全員が同じ進度で行うことになった。

教材についても、これまで使用されてきた *Japonais, Manuel de première année* は、一つ一つの課に、初級から中級前半までにまなぶ多様な文法項目を詰め込みすぎていた傾向があったため、『げんき I・II』³に変更した。このマニュアルを選んだ理由は、難易度の低いものから高いものへと順次文法項目が導入されていること、文法の説明が詳しいので、学習者の自習用にも役立つこと、漢字の読み書きや、作文、聞き取り、会話の練習問題などが充実しており、一冊で「聞く、読む、話す、書く」の4技能を磨くことができることである。ただし、初級のはじめの頃は、使い勝手の悪いテキストであったので、その欠点を補うために、別な教材（『文化初級』など）を用いた。教材の選択、全体の授業のプラン、筆記試験問題の作成などは、責任者であるファヴネク教授が行い、チームをあげての「文法積み上げ式」による教育方法が取られるようになった。

とりわけ、おしなべて学生の会話能力が弱いという問題に対処するために、これまでは短文を繰り返すパターン・プラクティスでしかなかったオーラルの授業をより充実させ、発表、ロールプレイなどの練習を主にする授業にし、むしろパターン・プラクティスは、聞き取りの練習とともに、ラボの授業で集中的に学習させるようになった。会話・ラボの担当者は日本語しか話さないという点を徹底。例えば、学生と廊下であったときにも常に日本語で話すようにとの指示が学科全体で出されている。

一方、作文の練習についても、簡単な内容でも日本語の文を作れない学生が多いという反省から、1年生の「作文・漢字」のTDでは、毎週、習った文型と漢字を使った作文の小テストを行うことになった。毎回の小テストの結果は学生にインターネットの授業のサイトを通して発表され、答えは毎週返却される。できの悪い学生は、チューターのもとで補習を義務付けられている。

チューターとは、修士課程に在学する学生2名によって開かれる日本語補習授業のことである。授業と言っても学生がそれぞれ自分の質問を持ち寄ってチュータに会いに行くというもので、質疑応答をくりかえしながら、自分の分からないところを復習するという目的で行われている。現在、チューターには、フランス人学生（レリソン）、日本人学生（渡辺）が着任しており、一週間に3回の割合で1年生を対象に補習授業が開かれている。学生の中には、このチューターを毎週欠かさず活用して力を伸ばしているものもいる。学生どうしということもあり、気軽に質問もしやすく、またチューターは折々に先輩としてのアドバイスもしてくれているようで、教員が教える授業にはない好ましい効果が出ている。また、チューター自身が、修士課程で日本語を学んでいる学生であり、彼ら自身にとっても教えることを



ファヴネク教授の文法講義



会話の実習授業



作文と漢字の実習授業

³ 坂野永理他『初級日本語 げんき I・II』The Japan Times

通して日本語を学びなおす機会になっている。学生どうしが知識を共有しつつ学んでいくよい実例といえる。

さて、1・2年次での教育上の困難は非常に物理的、かつ運営的な問題である。学生の登録数が毎年激増しているため、TDのグループの人数が多すぎるという問題点が指摘されている。2008年には会話のTDのグループの人数は30人程度であったが、現在50人を超えている。教育効果を出すためにはグループ数を増やす必要が生じてくるが、人件費と人手不足で改善が難しい。また、大学受験がないフランスならではの問題であるが、バカロレア大学入学資格さえ持っていれば基本的には全員の入学を受け付けるので、毎年9月から10月一杯をかけて行われる学生の入学手続きを待ってみたいことには、一体何人の学生がその年に日本語学科に登録するのも分からない。教務課から日本語学科の教員に学生の正式なリストが回ってくるのは前期試験直前になってからという有様であるから、必要なグループ数、教室の大きさなども前もって知ることができず、授業が始まった後で、人手不足、教室不足の問題に気づき、右往左往しなければならず非効率的である。

(e) 2年生の後期から3年生：中級・長文読解と翻訳の導入

2年生の後期から、3年生にかけては、中級レベルの日本語修得を目的とする。会話テキストや800字程度の中程度の長さのテキストを学習してきた1年生、2年生のときとは異なり、長文読解に学習の比重が置かれるようになる。また、2年生の後期から、翻訳の授業も導入される。翻訳の担当はブトンス准教授である。翻訳では日本語の内容を分析して把握することが前提であるが、それ以上にきちんとしたフランス語力も要求される。学生にとっては国語力も問われる科目である。学生の中には将来の職業の一つとして、翻訳業につきたいと考えているものも少なからずいるので力を入れている科目である。

3年生の授業では、2008年には、何か統一したキーワードなりテーマを決めてそれについてそれぞれの教員が授業をするという方法を取った。ちなみに、2008年のテーマは「環境問題」であった。共通した語彙や言い回しを何回も練習する機会が得られるこの方法で、確かに教育効果は出たものの、やはり自由なテーマで授業をするべきだという准教授側の意見も出て、この試みは頓挫し、2009年以降、2名の准教授はそれぞれの好きなテーマで選んだテキストで翻訳授業を行うようになった。（ブトンス准教授は、宗教関連の問題を扱ったテキストや雑誌やインターネットのニュースに出ている時事問題を翻訳させている。コンドミナス准教授は、雇用問題、高齢者問題などのテーマを扱った資料を訳させている。）これらの授業で、学生達は実際に日本の新聞や雑誌などの生きた教材に触れることになるが、専門的な分野に関係するテキストであるために、文法的、語彙的に難易度が高い文章をいきなり翻訳することになる。

つまり、問題は2年生までの積み上げ式で教えてきた内容と実際の専門分野のテキストに現れる文章のレベルのギャップなのである。中級を飛び越えていきなり上級レベルの新聞や専門書の内容を翻訳をしても教育効果はないという意見と、その一方で、教科書的で人工的な文章だけではなく、生きた日本語に数多く触れるべきであるという意見のジレンマに陥っており、中級レベルの教育をいかに進めて行くかが今後、プロバンス大学の大きな焦点になっている。

現在のところは折衷案として、2人の准教授に専門的な文章の翻訳をまかせつつも、積み上げ式教育はファヴネク教授を中心とする日本人講師のチームによって続けられている。その教材として使用されたテキストは、『文化中級Ⅱ』⁴（文化外語）の「なんでもたべよう」「バスケスモレラさんのインタビュー」「食をみなおす」「地球があぶない」などである。これをベースに文法、作文をファヴネク教授が担当。秋廣の担当する会話Ⅰの授業では、テキストで習った語彙や表現を使いつつ、テキストの内容に近い話題について学生どうしの討論や口頭発表をさせる授業をしている。カルニノ講師の担当する会話Ⅱでは、「依頼する」「断る」「情報を求める」といった機能的、あるいは場面的な分類に応じて、これまで初級・中級でならった表現の復習と応用を目標に、対話モデルを与え、それを元に、ロールプレイを繰り返し行っている。

(f) 修士課程 1 年—2 年

現在、日本言語文化専攻の修士課程は存在しない。したがって全ての学生が研究職向け修士課程である現代文学科・アジア・オセアニア研究コースか、企業就職向け修士課程である応用外国語科・英語—日本語コースに分かれて属している。後者の課程はさらにいくつかの専攻に分かれており、翻訳業専攻、国際関係専攻、人道的プロジェクト専攻（この課程を出て NGO 団体への就職を目指す学生が選択をする専攻）国際貿易商業専攻の学生がいる。

修士課程への入学数も年々増加している。2008 年には 6 名しかいなかったが、2009 年には 8 名に増え、今年は 12 名に増えている。多くの学生が既に一年から 3 年間の日本留学を体験しており、学生の会話・聞き取り能力のレベルは 3 年生に比べ格段に上達している。したがって、会話の授業のレベルは非常に高く、教材にも、ラジオやテレビのニュース、映画、ドラマなどのオーディオ・ビジュアル教材を使い、その内容の大意を把握して、それについて自分の意見を述べたり、話し合いをするという授業が可能である。一方、テキストの大意をつかむことや、内容理解の質問に答えることはできても、レベルの高いフランス語力とフランス語と日本語をきちんとつぎ合わせる対照的な分析力を必要とする翻訳の作業は、留学帰りの学生にとっての弱点である。

修士課程 1 年生の日本語教育の担当は、ファヴネク教授（文法・作文・漢字）、コンドミナス准教授（現代社会に関するテキストの翻訳）、プロトンス教授（宗教関係のテキスト、時事問題に関するテキストの翻訳）秋廣（会話）である。授業は各教員が週 2 時間ずつ行うので、合計 8 時間にのぼる。日本語だけに 8 時間というのはかなりの時間数である。修士の学生はそのほかに研修やレポートや他の科目の授業などもあり、猛勉強を強いられている。

その代わり、修士課程 2 年生になると日本語の授業数は週 2 時間のみに減ってしまう。これでは日本語の勉強に足りないのであるが、この時期になるとむしろ論文や自分の研究のために時間に時間を割かなくてはならない。修士課程 2 年生の日本語授業は、もっぱらファヴネク教授によって行われている。修士課程 2 年に関して言えば、学生の増加はなく、今までの 3 年間を見ても、大体 4 人から 5 人程度である。卒業後の進路については、年によっても、

⁴ 『文化中級Ⅰ・Ⅱ』文化外国語専門学校

学生の専攻する内容によってもまちまちだが、2010 年に応用外国語学部・英語－日本語科の修士 2 年を修了し卒業した学生 2 名は、現在、日本語の翻訳業に携わっている。（1 名はフリーランスとして文学作品から漫画に至るまで様々なジャンルのテキストの翻訳の仕事を引き受けている。もう 1 名は、東京の翻訳事務所に研修生として働いた後、引き続き社員として雇用された。）

(g) Moodle の活用

デルティユ時代との非常に大きな違いは、インターネットの活用である。全ての授業の資料（テキスト、オーディオ、画像）の配布から連絡事項にいたるまで、Moodle⁵ を用いて配信することができる。Moodle とは大学と学生を結ぶサイトとして使えるように様々な学習用機能をそろえたシステムのことである。このシステムを使っている大学は多いが、プロバンス大学も 2010 年より導入した。それ以前にもこれと類似したシステムである Claroline を用いていたが、よりグローバルに使用されているシステムであるという理由で、現在は Moodle を使っている。大学のサイトのアドレスは、<http://moodle.univ-provence.fr/moodle/> である。このサイトにアクセスするためのメールアドレスとパスワードが入学時に全ての学生に与えられる。

各教員が各授業のサイトを開くことが出来るので、このシステムの導入により、仕事や病気で授業を受講できない学生にも授業の内容を知る機会が与えられることになった。

学生は毎日授業に出ると同時に、インターネットでその日の授業の内容をチェックすることが出来るし、授業中に配られる資料のほとんどがインターネットでダウンロードできるので欠席したときや、資料をなくしたときにもあわてなくてよい。オーディオ・ドキュメントなどの掲載も可能であるので、授業中に理解できなかった内容を何度も見て、聞いて復習することができる。

また教員と学生間の連絡方法としても便利で、このサイトを通して授業に登録している学生全員に即座にメールで連絡を流すことが出来る。また学生もちょっとした質問があるときやアポイントメントを取りたいときには、このサイトからメールで送ってくることが多い。

このシステムの機能はかなり多様で、E-learning としての機能も十分に果たすことができる。例えば、選択式の練習問題であれば、オンラインで行うことが出来、採点も自動化できるという利点がある。また、学生のアクセス状況が統計で現れるので、アクセスしてこない学生には注意を呼びかけることも可能である。自習あるいは補習の教材として非常に有効である。

サイトは教員各自によって運営・管理されており、その教員の情報処理に関する知識と能力次第で内容にかなり差が出てしまっている。大学側が Moodle の使い方についての研修をしているが、研修に行く時間がないとか、研修に出てもよく分からないということが多く、有効な解決法には至っていない。また便利である反面、あまりにこれに頼りすぎて、教員が

⁵ Moodle についての詳しい説明は、そのインターネットのサイト <http://moodle.org/about/> を参照のこと。

サイトの管理作業に始終追われてしまうという本末転倒の状況も生じている。また、このサイトを用いて、何がどこまでしてよいのかということについての教員どうしのコンセンサスがあまりないので、たとえば、サイトを使ってオンライン試験をしていいかどうかといったことをめぐって、学科内で議論になったりしている。また、学生の中には、経済的な理由でパソコンがない、あるいは、インターネットのアクセスがない学生も若干名存在するために、そうした学生にとっては、不公平が生じていることも否定できない。

(h) 日本語能力試験

日本語能力試験 4 級、3 級の受験を積極的に推奨している。特に日本との交換留学プログラムに参加したい学生には、4 級合格が義務付けられている。今年は、16 名が 4 級に合格、2 名が 3 級に合格、そのほか 2 名が 2 級に合格している。4 級の受験に関しては、ファヴネク教授と秋廣が受験対策のための補習授業を 10 月から 12 月にかけて週 2 回のペースで行った。対象となる学生は 2 年生・3 年生の 4 級受験希望者である。希望者は 18 名。合格者 16 名であるから、ほぼ 90 パーセントの受験者が合格したことになる。フランスでは受験会場が少なく、リヨンまで行かなくてはならないということもあり、全員への受験を義務付けるわけにはいかないが、2 年生以上 4 級受験は推奨されているので、これからも受験者、合格者は増えていくことと思われる。

(i) 交換留学システム

プロバンス大学と交換留学協定を結んでいるのは以下の 8 大学である。各大学に 1 名、もしくは 2 名一全部合わせて 15 名の留学生を送ることができる。

- 大阪大学 2 名
- 九州大学 1 名
- 駒沢大学 2 名
- 上智大学 3 名
- 名古屋外国語大学 2 名
- 南山大学 2 名
- 明治大学 2 名
- 立命館大学 1 名

学生は 3 年生か修士 1 年生のときに留学をし、留学先で単位を取得し、翌年には修士 1 年か修士 2 年に戻ってくる。ここ数年は、学生の人数も増えていることから、交換留学に参加できる学生はかなり優秀な成績を納めていないと選考に漏れてしまう。学生数の増加から、必然的に競争率の厳しさが増していることもあり、交流に参加できる学生のレベルは徐々に上がってきていると思われる。

今後、さらに多くの学生が留学できるよう、現在、新しい協定を結んでもらえる大学を探しているところである。

帰国後の学生が、本学の修士課程の主要な学生となるので、留学の成功・不成功は大学にとっても優秀な学生を確保する上で、非常に大切な問題である。また、帰国後の日本語教育では、どの学生も帰国して1年もすると日本語を話す機会が少なくなるので、どうしても会話の力が後退していくために、それをどう引き上げていくかということ、また留学中は全く勉強していなかった翻訳のテクニックをきちんと学ぶことが、本学での修士課程での課題になっているようだ。

(i) 読書会、クラブ活動、ブログ

授業外で日本語クラブや日本人留学生との交流会、ブログなどがある。最近、大学構内を使って、自主的に読書会や、交流会などがよく行われるようになっている。

日本人学生の有志2名がイニシアティブを取り、日本文学の読書会が始まった。毎週一回日本人学生とフランス人学生がいっしょに集まって文学作品を読んでいる。

大学構内で、日本在仏領事館の支援を得て、日本映画の上映会なども行われているが、あまり目新しい映画は上映されず、非常に選択の幅も限られている上に、最近の学生は、大概の映画はインターネットで見てしまう、ということもあって、あまり成功している試みとは思われない。

日本人学生との交流を目的としたクラブがある。残念ながら、日本人学生のフランス語レベルがある程度高いために、日本人学生との会話はもっぱらフランス語になってしまっているので、会話の練習にはあまりなっていないようだが、毎週集まって交流を楽しんでいるようである。

しかし、日本人留学生が全くフランス語の初心者でフランス語が話せない場合には交流会が日本語でなされるチャンスが大きい。先月、到着した駒澤大学の日本人短期留学生との交流会がまさにその例であった。プロヴァンス大学の留学生フランス語教育センターの所長であるマルティヌ・ファラコ准教授のよびかけで実現したこの交流会は、短期留学生の滞在期間中（3週間）に何度か集まりがあり、その際に、日本語学科の学生が、イニシアティブを発揮して、日本語の授業を紹介したり、ピクニックなどを企画したりして、日本人学生のホストを務めた。



今回の東北大地震を受けて、まっさきに募金活動に乗り出したのも、日本語学科の学生であった。また、来る4月9日には、本学では初めての試みであるが、学生たちが日本文化を学内で発表するための催し物を企画している。プログラムとしては、学外から講師を招いて講演会をしたり、日本人留学生の応援も得て、習字、俳句、武道、日本料理などのアトリエを開いたりすることが企画されているようだ。費用は大学から出る。

学生同士が作っているブログも存在する。このブログで学習者同士が様々な情報を交換したり、お互いにアドバイスを与え合っているようである。ちなみに一番大きなブログは、日

本語文学文化学科の 1 年生から 3 年生が中心で作っているもので、そのサイトのアドレスは、<http://llce-jap.aix.forumactif.com> である。

(3) さいごに

以上がプロバンス大学における日本語教育の変遷と現在である。毎年大人数の学生が入学してくる。その中で、より多くの学生に、日本や日本語への学習意欲を与え、勉強を続けさせることが 1 年生、2 年生の日本語教育の目標である。それ以降、意欲的に勉強を続ける優秀な学生にはより多くの留学や研修のチャンスを与え、そういう機会に恵まれなかった学生にも、3 年間、4 年間をかけて、大学で日本文化や日本語の基礎を学んだという達成感を味わってもらえるような日本語教育を目指している。